

次の文章を読んで、後の課題に答えなさい。

歴史像は、なにか歴史について問題を問おうとする人がいて、はじめて描かれて姿をとるものである。自動的に過去の歴史像が存在するわけではない。各人が、現在の関心に沿った問題化をして、ある対象についての歴史を研究する。したがって入口は、まことに多様でありうる。

では、各自がそれぞれの関心事から入ってゆくとすると、歴史の理解はバラバラにならざるをえないのだろうか。たしかに理論上は、その可能性は否定できない。バラバラにならないために課題となるのは、個別の問題対象を扱うにしても、その問題が全体的な歴史的脈絡のなかでどのような位置にあるものとして理解できるのかを、つねに問うという姿勢である。

われわれが歴史的な過去へと接近できるのは、現実には個別の問題からでしかない。それは、個人の能力的な限界とか時間的制約というよりも、そもそも過去を丸ごと全体として復元するのは、不可能だからである。しかし個別の問題が、全体的な歴史の脈絡との関係でどう理解できるのか、と問いを立てるか否かは、その問題の理解の幅を大きく変えるであろう。

食の問題を例にしよう。ある時代のある社会において、どのような食糧事情があったのか。これは、いったいなにを食べていたのか、という素朴な疑問でもありうる。しかし、階層や男女によって食の作法や食べるものに違いがあったとすれば、そのような違いが維持されていた経済的、あるいは政治的な仕組みが問われるだろうし、あるいは文化的、宗教的な理由が問われるかもしれない。また、ある時期からあらたな食糧が普及していったとしたら、それはどのような交易の発展によるものなのか。あるいはその普及によって、社会生活のリズムや感覚はどのような変化をこうむったのか。そのように問いを広げてゆくこともできる。たとえばヨーロッパ史にとつての香辛料や砂糖、イギリス史にとつての茶などが、その格好の事例として想起できるであろう。イギリスにとつて中国からの茶葉の輸入の歴史は、ついにはアヘン戦争にまでいたる植民地政治と深く関係していたのであった。

したがって問題となるのは、個々の問いの追究をただそれだけで満足してしまうのか、それとも他の諸問題との連関のあり方、すなわち問題構成を自分なりにしっかりと立てることができるのか、という点である。

歴史は過去についての問いである。では現在とは関係がないのか、といえ、そんなことはない。歴史と現在とは行ったり来たり、いわば往還の関係にあるといつてよい。

歴史への興味とは、昔はいつたいたったのだろうか、という好奇心を満たすためのものなのであるか。歴史が好きだ、好奇心がある、不思議大発見だ、といった興味が悪いわけではない。知らないことを知りたい、という知的欲望は、人が生きるうえで基本的なものとも思う。たいせつな出発点というべきであろう。しかし当然ながら、過去への問いかけは、現在を生きるわれわれ一人ひとりの存在を抜きにしてはありえない。そして実態としての過去そのものを、全体的に捉え返すことなど、神ならぬ人間にはとても不可能である。

私たちが生きている現在でも、ちよつと過ぎれば時間的には過去となる。では、少し前の自分の経験がどういう状態であったのだろうか、という場面を、記憶や資料をもとに正確に再現することはできるであろうか。全体について漏れなくすることは、どうあがいてもできない。できるのは、ごく限られた側面についてのみである。写真で固定すればできるであら

うか、といえ、そうはいえない。被写体を操作することがなくても、アングルによって、あるいは技術的な限界で、写真は実態のごく一面を切り取ったものでしかないからである。ヴィデオなどの動く画面でも同様である。まして、現在からすれば直接的な経験の範囲を超える、文献史料にせよ非文献資料にせよ限られた数しか手にできない過去については、そのわずかな断面をわれわれは捉える以外にない。過去を生きた人たちの喜びや楽しみにしても、苦労や苦しみにしても、正確にはわれわれはそのごく一面しか推察できないのだ、という限界についての謙虚な自戒が、歴史を問うにはまず必要だと私は考えている。

そのうえで、現在を生きている人間が、ある問題について関心をもって問いかけるとき、はじめて歴史像を描く道への出発点ができる。そうやって問いかけがあつてはじめて、なにを史資料として利用できるであろうか、というつぎのステップの問いへと続いてゆく。あるいは過去からの遺物に接して興味をそそられ、そこから歴史への扉が開かれる、という場合もあるかもしれない。いずれにしても、そうした問いがあつて、ある文字表象や物体が史料ないし資料としての価値を帯びるのである。

そうした手続きを踏むことによって、われわれは、歴史像の構築へと歩みだす。描かれる歴史像は、過去の実態そのものではない。タイムマシンは残念ながらないのであるから、そこには、歴史を問う者によって再構築された過去の一面についての像があるのみである。そこにあるのは、現在を生きる者によってなされた解釈の結果としての歴史像である。したがって、歴史像の再解釈ということは、つねにありうることといわなければならない。

しかし、だからといって価値が下がるわけのものではない。歴史的過去に限らず、われわれは生きるなかで、不断にそのような認識手続きを踏んで自分の位置を測定しているのである。歴史を研究する場合、多くは時間的なスパンが遠くまで及んでいる、というだけの話である。そして学問としての歴史学には、勝手に思いつくままに再構築を僭称してよいという規定はない。自分たちがおこなっている学問の作法を、たえず再検証する姿勢こそが、規定されていなければならない。

一定の史料から、多くの人にとって納得できる歴史的事実を認定してゆくことは、史料状況によって不可能ではないが、すべての事象について、それが可能である保障もない。事実を認定するための史料の読みからして、つねに解釈がつきまとうこともたしかである。しかし、裁判における証拠調べと同様であるが、誰もが納得できるような事実の認定という作業はありうるのである。そのような事実認定の作業と、その認定された諸事実のうえに立った全体的な解釈という作業とは、基本的に別の認識作業にあるものと考えることができ。私がかここでいっている歴史像とは、これらの二重の作業を繰り返し多様にクロスさせながら生み出されてくるものと理解できるであろう。

たしかに歴史学は、過去の人たちが生きた軌跡を対象としている。しかしその歴史を調べ、考える思考の現実においては、まさにその問う人がどのように現在を捉え、現実を考え生きているかが、かかわっている。

もちろん、過去の世界を理解しようとするのに、現在の常識を持ち込めば、時代錯誤におちいる可能性が大きい。それはできる限り、避けなければならない。しかしここでも、まったくの先入観なしに、まったくの白紙の状態で過去の世界について眺めることができるのか、といえ、それも困難といわなければならない。過去のある側面について、それを問題として問おうとすることそのものに、すでに現在の判断がかかわっている。できるのは、自分の理解や判断が時代錯誤を犯してはいないか、現在の常識で過去を見てしまっていないであろうか、という、たえざる検証の姿勢であろう。過去の世界を生きた人びとの思考や

感性の体系、行動の仕方は、現在とは大いに異なる可能性があるものとして、理解しようとしなければならぬ。ひらたくいえば、かんたんに分かったつもりになってはいけない。

多くの場合、歴史的な過去のことからを問うなかで、意識的無意識的を問わずわれわれは、自分自身と現在を問い直している。それは、歴史を現在に都合がよいように解釈し、手軽な処方箋を手にしようというのとは違う。逆に、歴史をただ過去のこととして固定化してしまい、現在を正当化するのとも異なる。今われわれが生きている世界の歴史性を捉えようとしている、ということである。

二〇世紀末から現在の世界は、さまざまな点で大転換といいうるような世界的曲がり角にある、と私は考えているが、この大きな変化には、しかしその底流に歴史の襲いのような折り重なり、あるいは地層のような重なり合った食い込みが、随所で現在の歴史性を構成するものとして認められる。歴史における大転換や断絶といっても、全取り替えや白紙還元は、現実にはありえない。たとえば、およそ直接的な身体感覚が鈍化してしまっているわれわれの生き方や感性のなかにも、あえて誤解を恐れずにいえば、古代的なものすら生きているといえるかもしれないのである。

現在の歴史性を明らかにしようとすることは、表現を換えれば、現在の自明性を問い直す、ということでもある。たとえば、現代の日本社会で生きているわれわれには、あたりまえと見なしてあえて問うことなしにすませていることは多い。通常の生活を送るにあたって、いちいちこの行動の根拠はなんであるか、などと問うものはいない。しかし、ごくあたりまえと思っている状態は、はたして現在の世界各地でも通用するのであるか、歴史的な過去においても通用するのであるか、と問い直してみるのは無駄ではない。いったいいつから、あたりまえと見なされるようになったのか、と問うのもよい。

例はいくらでもあるであろう。学校のあり方、家庭での人間関係、電気や水道など現代生活には不可欠の条件、こうした身近なところのあり方から、政治や組織経営などにいたるまで、現在あたりまえのように見なしているものごとが、いったいいつからそうなのであるか、ということ、いろいろ考えてほしい。過去を問うことは、じつはその根において、現在を問うことにつながっているのである。

(福井憲彦『歴史学入門』より。一部変更)

課題

(一) 右の文章で「歴史を問う」とはどのようなことと考えられているか、八〇〇字以内でまとめなさい。

(二) 文学部で学ぶということについて、右の文章を踏まえながら、あなた自身の考えを一〇〇〇字程度で述べなさい。